

臨床心理面接技法習得にチームアプローチを用いた学習効果 に関する研究 —KJ法を用いて—

(教育学部教育心理学教室) 相模 健人

An effect of team approach for the purpose of acquiring Solution Focused Brief Therapy — Analysis of KJ method—

Takehito SAGAMI

(平成22年6月5日受理)

I. はじめに

筆者は所属する教育学部の大学院学校臨床心理専攻臨床心理学コースの専任教員である。本コースは臨床心理士第1種指定大学院であり、筆者ら教員は臨床心理士資格を目指す大学院生の指導に当たることになる。臨床心理士資格に求められる専門業務の一つである臨床心理面接について大塚(2009)⁽⁸⁾は「大学院生の面接技法のトレーニングでは、この普遍的で有用な体験知の獲得がもっとも強く求められます」と述べ、その重要性を強調している。

筆者はこの臨床心理面接技法習得にあたって、大学院生に対してチームアプローチを用いてその指導を行っている。チームアプローチはもともと家族療法(Family Therapy)の分野で発展してきた。もともと家族療法はその始まりを人類学者Bateson,G.らの、1962年から数年間スタンフォード大学を拠点にして統合失調症患者のコミュニケーション分析を別室からマジックミラーを通して観察し、家族内二者関係にみられる病原的なダブル・バインド(二重拘束性, Double Bind)コミュニケーションの現象を発見したことが始まりである⁽⁹⁾。

心理相談室でも一般的なマジックミラーについてHoffman,L.(1981)⁽⁴⁾は「マジックミラーは、心理療法を二室間相互交渉に変え、新たな次元を探ることができ、機会を与えたからである。(中略)治療の過程も二室体制の恩恵を受けることができた。治療課題を分担するために二部屋を使うことは(分担の内容は別にして)システム変化を組織するより新しい、より強力な方法となっていた」と家族療法における発展の経緯を述べて

いる。その後、構造家族理論を唱えたMinuchin,S.(1974)⁽⁷⁾はワンウェー・ミラー(マジックミラー)を用いた観察を推奨した。このことについてBarker,P.(1986)⁽¹⁾は「家族療法が現れるまでは、治療者は互いの治療をみることはほとんどなかった。訓練中の治療者でさえも治療セッション中に生じたと自分が思うことをスーパーヴァイザーに報告するにとどまっていた。家族療法家は、通常の治療実践にワンウェー・ミラーを通して見聞きできる観察者を置き、必要とあらば繰り返し治療の過程を見返すことのできるビデオテープを用いるなどして、治療の過程を開かれたものにした」とビデオシステムを用いたチームアプローチが発展していったことを述べている。

遊佐(1984)⁽¹⁰⁾は家族療法チームについて以下のように説明している。

「治療に臨む家族は、マジックミラーの裏に家族療法の専門家数人がいて、治療が成功するように援助してくれるということをセラピストから説明される。(中略)家族にとってこの専門家の『チーム』との接触は主にセラピストを通して行われる。セラピストは定期的に行われるセラピストと『チーム』との会議のためや、時には治療室の戸をノックする『チーム』に呼び出され、暫く家族を治療室で待たせた後、治療室に戻り、『チーム』のメッセージを伝達する。伝達の方法は、セラピストが『チーム』からのメッセージの手紙を読み上げる場合もあれば、単に口頭で行う場合もある。また、インターコムを通して『チーム』からセラピストへ支持を与える場合もある。(中略)実際には『チーム』のメッセージは、

チームとセラピストが協力して準備する」

このような形式でチームアプローチが行われている。

チームアプローチは、家族療法から影響を受けながら短期療法（Brief Therapy）にも受け継がれている。筆者の専門とするSolution-Focused Brief Therapyは1980年代にBerg,I.K.やde Shazer,S.らがミルウォーキーにあるBFTC（Brief Family Therapy Center）において発展してきたが、その発展過程において「彼らは個々の面接を観察し、最も有効なことに注目するという帰納的な方法で研究を重ねてきた」（de Jong,P., Berg,I.K., 2007）⁽²⁾ のであった。このようにチームアプローチがそれぞれの臨床心理面接技法の発展に大きな役割を担ってきたことが伺える。

チームアプローチは臨床心理面接技法習得においても大きな役割を果たしている。初心者においては、チームからの助言、サポートを得ながら相談を行うことで学習が効果的に行えると考える。これまで臨床心理面接技法習得には従来行われているスーパーヴァイズに加えて、東（2010）⁽³⁾ がロールプレイを用いた学習や倉光・宮本（2003）⁽⁶⁾ がマルチメディアを用いたアクティブ・オブザベーションを行っている。しかしこういった研究に関しては学習方法についての研究であり、その方法が学習者側にどのような効果をあげているかについては明らかにされていない。

そこで本研究は筆者の行っているチームアプローチを用いた臨床心理面接技法習得が大学院生にどのような学習効果をあげているかを自由記述調査によって行い、KJ法（川喜多,1967）⁽⁵⁾ を用いて検証する。

Ⅱ. チームアプローチについて

ここでは筆者の行っているチームアプローチの方法について説明する。

筆者の所属する教育心理学教室に心理教育相談室仮分室の形式で相談室がある（資料1参照）。面接室にはビデオカメラがあり、隣室でチームが観察を行う（資料2参照）。相談受付は教育心理学教室ホームページ（<http://www.edupsynd.ed.ehime-u.ac.jp/edupsynd/sodan.html>）にて電子メールで行っている。現在のところ相談費用は無料である。

受理面接を筆者が行い、担当者を決定し、筆者ない

し大学院生の相談員が相談を担当する。面接技法はSolution-Focused Brief Therapyを指導している。チームは筆者の大学院ゼミの大学院生で構成されている。



資料1 相談室の様子



資料2 観察室の様子

大学院生はゼミ配属後、チームメンバーとなり、上級生あるいは筆者の面接を観察する。1年後期より面接を担当し、修了までに1～3ケースを担当する。親子面接などは共同、あるいは並行で面接を担当することもある。クライアントからの希望があればチームメンバーを紹介している。

面接を隣室でビデオを通して観察しメッセージ作成にはアイデアを出して共同でメッセージを作成する。相談終了後には時間を取ってチーム内での感想や助言を行う。

週1回カンファレンスを行い、ケースごとの検討も行っている。それとは別に筆者以外のスーパーヴァイ

ザーを大学院生個別にお願いしている。大学院生は相談を受け持つ前の試行カウンセリングのスーパーヴァイズ（指導教員が行う）を除いて、ケースのスーパーヴァイズを6回まで無料で行うことができ、それ以降は希望して有料でスーパーヴァイズを受けることができる。

現在のところ、このような形式でチームアプローチを行っている。

Ⅲ. 方法

1. 調査対象者 筆者が行っているチームアプローチで学ぶ大学院生5名（修了生3名、2年生2名）
2. 調査時期 2010年4月～5月
3. 調査内容 調査対象者には「チームアプローチについての調査」と題して8つの質問に自由記述を行ってもらった。質問は順に、質問1「チームメンバーとして初めて相談を見たときの感想を教えてください」、質問2

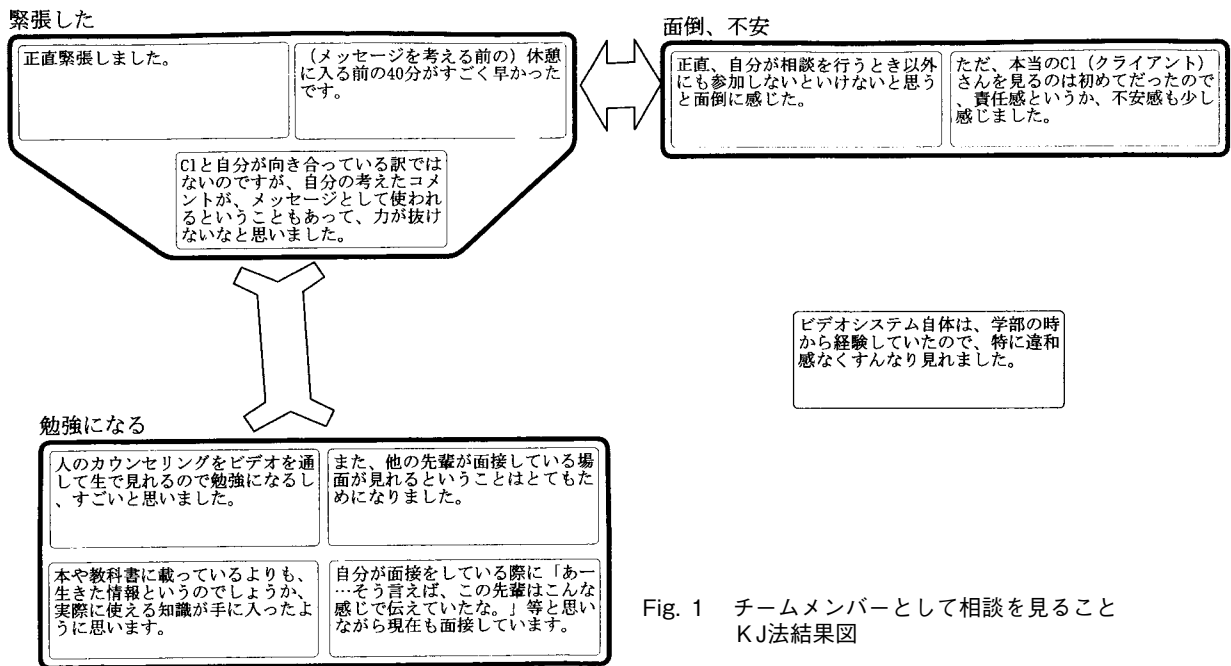


Fig. 1 チームメンバーとして相談を見ること KJ法結果図

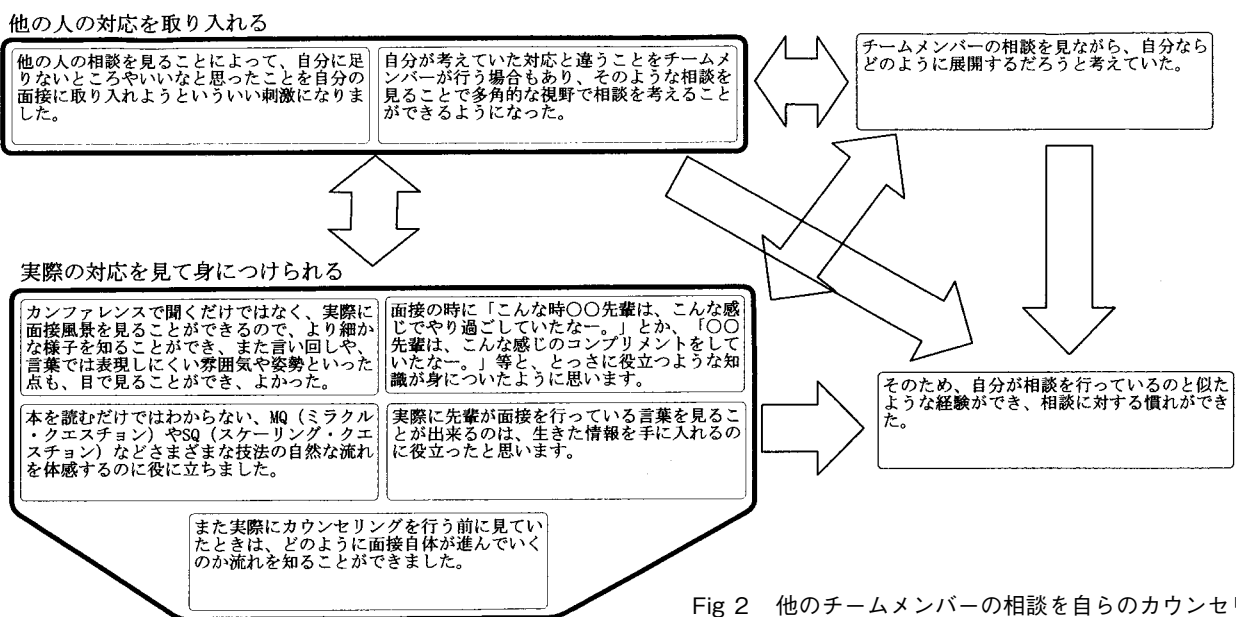


Fig. 2 他のチームメンバーの相談を自らのカウンセリング技法習得に役立てること KJ法結果図

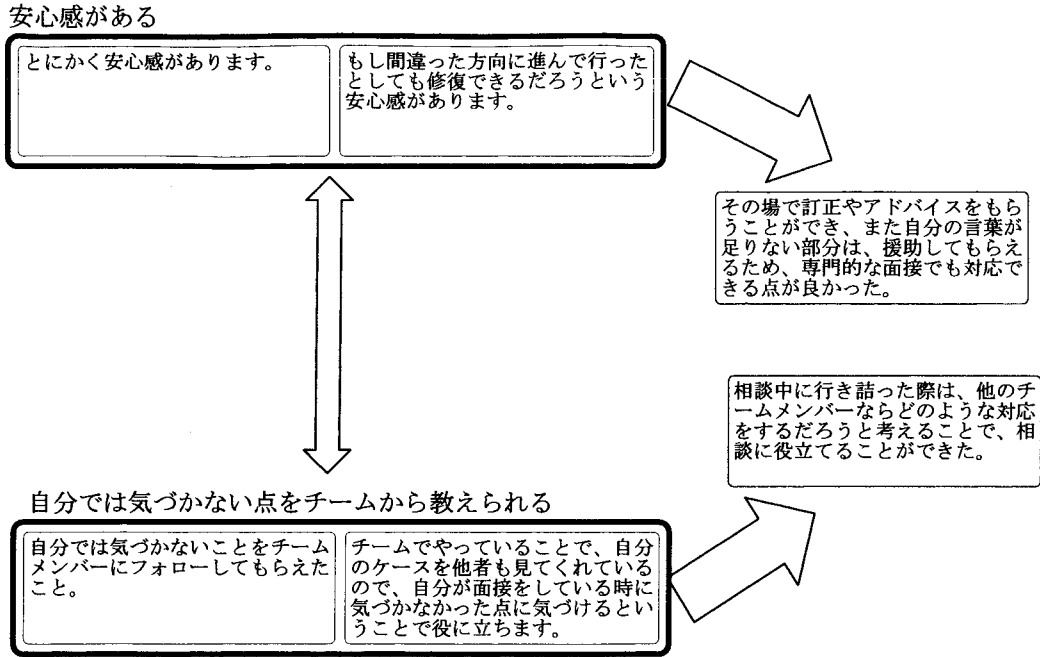


Fig. 3 学生がセラピストのときにチームアプローチが役立つこと KJ法結果図

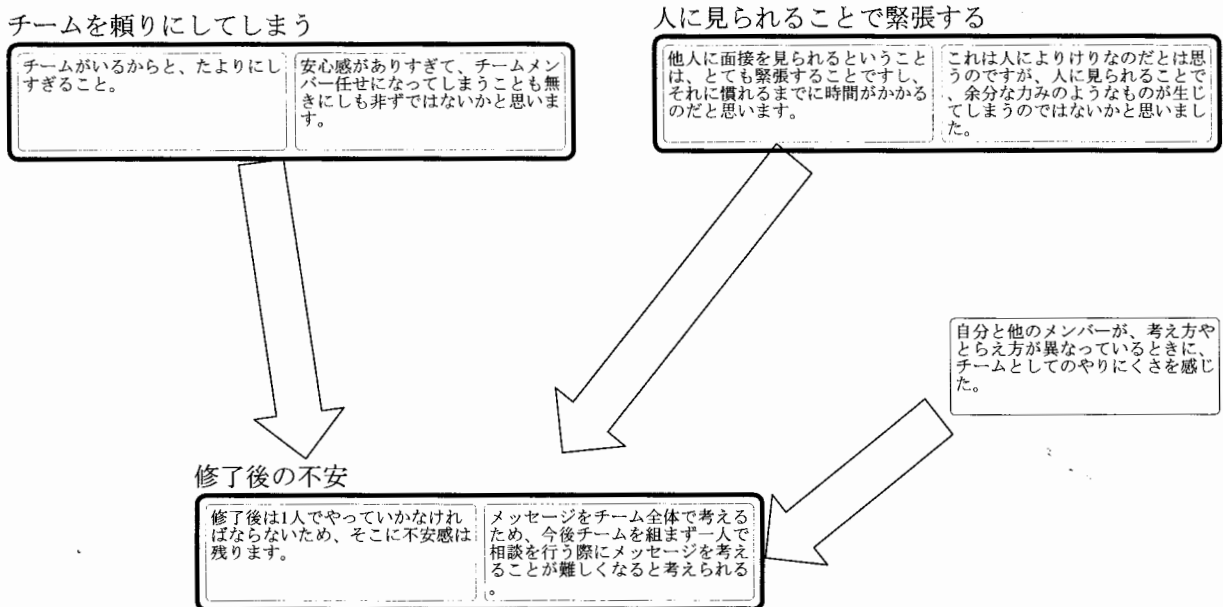


Fig. 4 チームアプローチの弊害 KJ法結果図

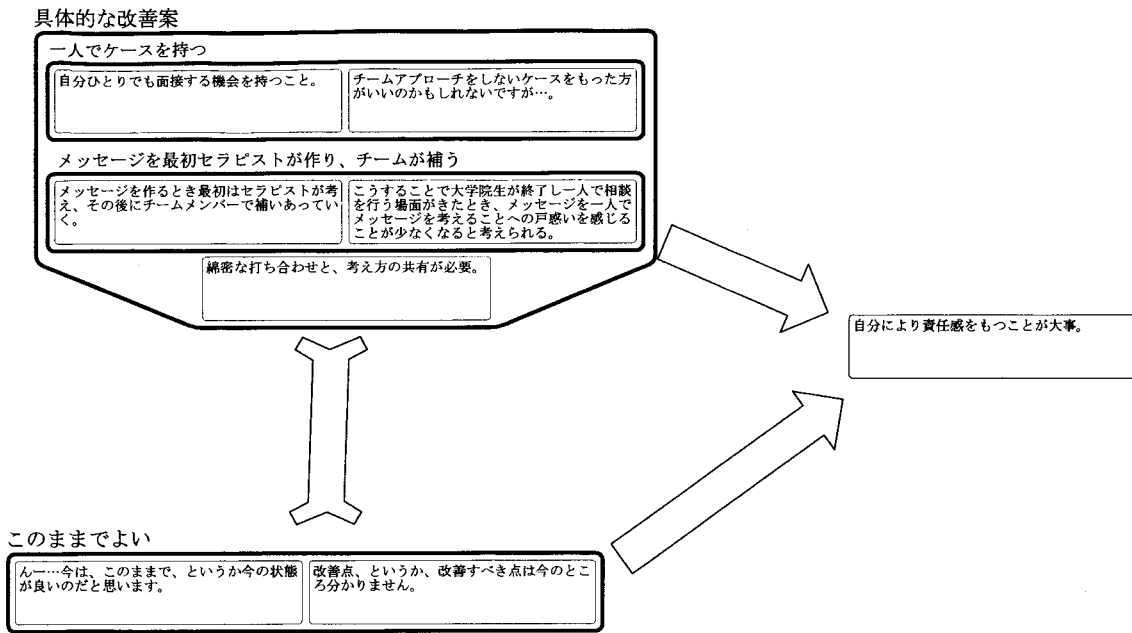


Fig. 5 弊害の改善点 KJ法結果図

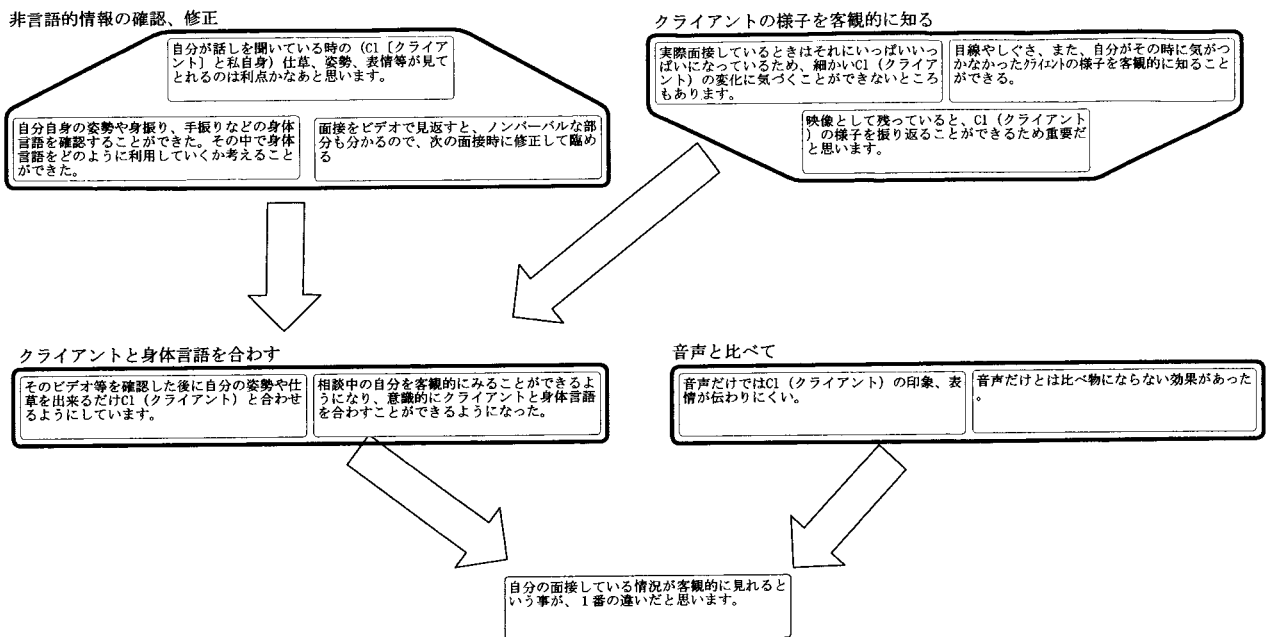


Fig. 6 面接をビデオで見返すこと KJ法結果図

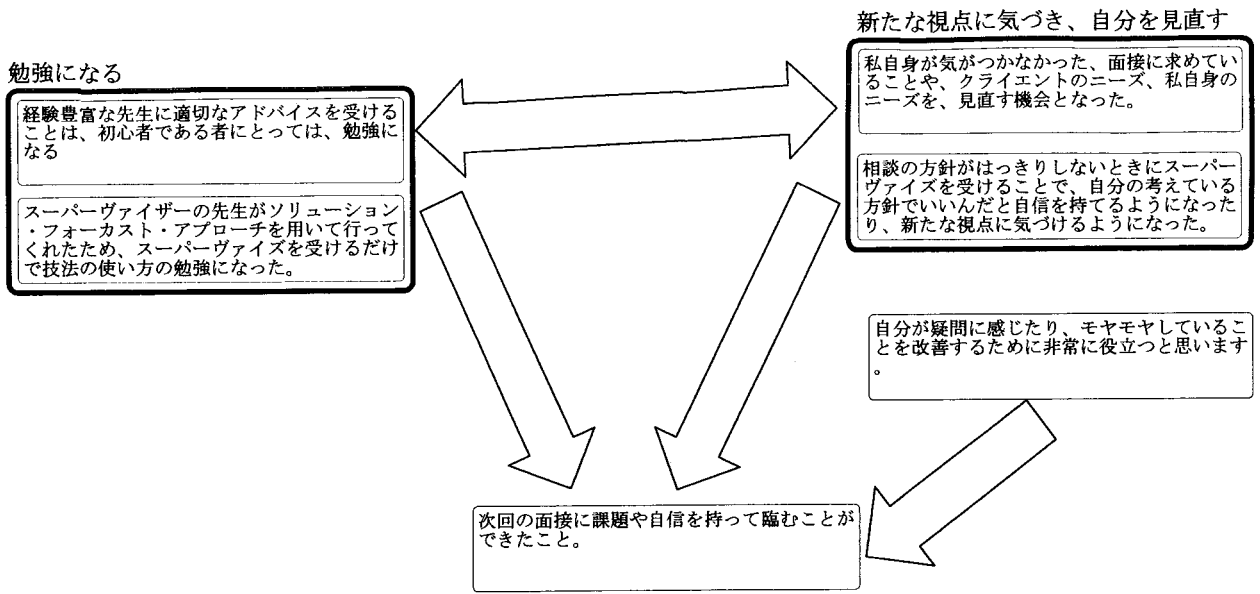


Fig. 7 スーパーヴァイズについて役立つこと KJ法結果図

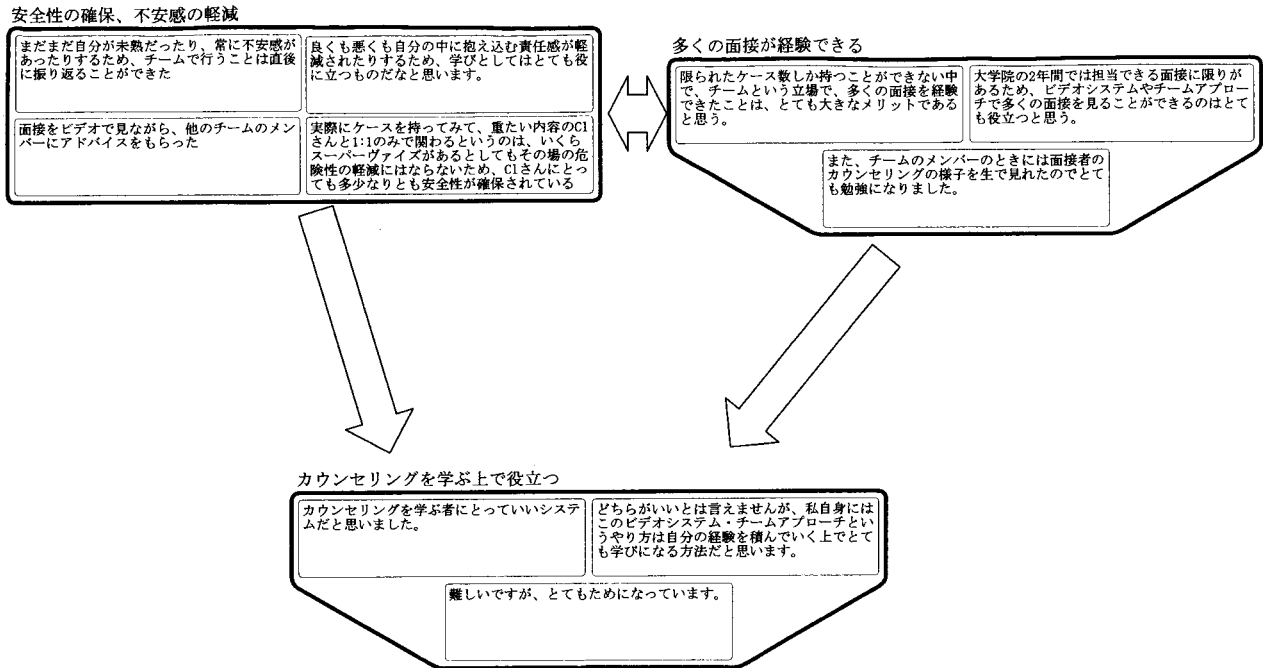


Fig. 8 その他の感想 KJ法結果図

「チームメンバーとして他のチームメンバーとして相談をしているのを見たことは、自らのカウンセリング技法習得にどのように役立ちましたか?」、質問3「自らがセラピストとして相談を行った際、チームアプローチを行っていることはどのように役立ちましたか?」といったチームアプローチを経験してみたの質問、質問4「チームアプローチの弊害として考えられることを教えてください」、質問5「4の改善点としてどのようなことが考えられますか?」といったチームアプローチの弊害および改善点に関する質問、それ以降は質問6「自分の面接をビデオで見返すことは、音声だけと比べてどのような違いがありますか?それは自らのカウンセリング技法習得にどのように役立ちましたか?」、質問7「スーパーヴァイズについて役立ったことを教えてください」、質問8「その他チームアプローチ・ビデオシステムについての感想を教えてください」といった質問で構成されている。調査対象者に調査用紙を配布し自由記述してもらった。

4. 結果の整理 「チームアプローチについての調査」で得られた大学院生の意見について、質問ごとにKJ法を用いて整理し、結果図を作成した。なお、大学院生の意見については明らかな誤字以外は大学院生の意見をそのまま使っている。また必要に応じて切片化している。KJ法の文章化を考察としている。

IV. 結果

「チームアプローチについての調査」の質問ごとの大学院生の意見をKJ法を用いてまとめたものがFig. 1～8である。

V. 考察

各KJ法の文章化を主に考察として進めていく。

1. チームメンバーとして相談を見ること

調査の質問1「チームメンバーとして初めて相談を見たときの感想を教えてください」についてのKJ法の結果としては、Fig. 1のようになった。島は「緊張した」、「面倒、不安」、「勉強になる」に分かれた。順に見ていこう。

「緊張した」の島では、「正直緊張しました」、「(メッセージを考える前の)休憩に入る前の40分がすごく早かったです」とテレビ画面を通してにもかかわらず、実際の

面接を見ることに対して学生がその責任を感じていることが伺える。これは「CIと自分が向き合っている訳ではないのですが、自分の考えたコメントが、メッセージとして使われるということもあって、力が抜けないなと思いました」と言った意見にも伺える。これと相互関係にあるのが「面倒、不安」の島であり「正直、自分が相談を行うとき以外にも参加しないといけなと思うと面倒に感じた」、「ただ、本当のCI(クライアント)さんを見るのは初めてだったので、責任感というか、不安感も少し感じました」と自分の担当ケース以外の相談を見ることやクライアントに対する責任感や不安があり、最初は戸惑いを感じているようである。しかし、これらとは逆に「勉強になる」の島では「人のカウンセリングをビデオを通して生で見れるので勉強になるし、すごいと思いました」、「本や教科書に載っているよりも、生きた情報というのでしょうか、実際に使える知識が手に入ったように思います」とその学習効果を学生も感じていることが伺える。また「また、他の先輩が面接している場面が見れるということはとてもためになりました」、「自分が面接をしている際に『あー…そう言えば、この先輩はこんな感じで伝えていたな。』等と思いながら現在も面接しています」と多くのセラピストの実際のやり取りを学生自身が取り入れていることが伺える。また「ビデオシステム自体は、学部の時から経験していたので、特に違和感なくすんなり見れました」と学部からビデオシステムを経験している学生は継続した学習の効果が伺える。

このようにチームメンバーとして相談を見ることに初めは緊張や不安を感じつつもその学習効果については学生も感じていることが考えられる。

2. 他のチームメンバーの相談を自らのカウンセリング技法習得に役立てること

調査の質問2「チームメンバーとして他のチームメンバーが相談をしているのを見たことは、自らのカウンセリング技法習得にどのように役立ちましたか?」についてのKJ法の結果としては、Fig. 2のようになった。島は「他の人の対応を取り入れる」、「実際の対応を見て身につけられる」に分かれた。順に見ていこう。

「他の人の対応を取り入れる」の島では「他の人の相談を見ることによって、自分に足りないところやいいなと思ったことを自分の面接に取り入れようといういい刺

激になりました]、「自分が考えていた対応と違うことをチームメンバーが行う場合もあり、そのような相談を見ることで多角的な視野で相談を考えることができるようになった」といった意見があり、他の学生や筆者のセラピストとしての対応から積極的に学習していこうという姿勢が伺える。学生も書いているように多角的な視点でセラピストの対応が学べるのは利点である。これと相互関係にある「実際の対応を見て身につけられる」の島では「カンファレンスで聞くだけではなく、実際に面接風景を見ることができ、より細かな様子を知ることができ、また言い回しや、言葉では表現しにくい雰囲気や姿勢といった点も、目で見ることができ、よかった」、 「本を読むだけではわからない、MQ（ミラクル・クエスチョン）やSQ（スケーリング・クエスチョン）などさまざまな技法の自然な流れを体感するのに役に立ちました」といったカンファレンスや本を読むことによる学習では得ることのできない実際の面接に触れることで得られる学習を学生がしていることが伺える。このことは「面接の時に『こんな時〇〇先輩は、こんな感じでやり過ぎていたなー。』とか、『〇〇先輩は、こんな感じのコンプリメントをしていたなー。』等と、とっさに役立つような知識が身についたように思います」、 「実際に先輩が面接を行っている言葉を見ることが出来るのは、生きた情報を手に入れるのに役立ったと思います」、 「また実際にカウンセリングを行う前に見ていたときは、どのように面接自体が進んでいくのか流れを知ることができました」と他の学生の面接から学んでいっていることが同様に見受けられる。こうすると「チームメンバーの相談を見ながら、自分ならどのように展開するだろうと考えていた」と学生が自ら面接展開を考えようとする姿勢に繋がり、「そのため、自分が相談を行っているのと似たような経験ができ、相談に対する慣れができた」と自らが面接を担当する準備として学習が行えることがわかる。

このように他のチームメンバーの相談を学生が臨床面接技法の学習機会として活用し、自らが面接を担当する準備をしていると考える。

3. 学生がセラピストのときにチームアプローチが役立つこと

調査の質問3「自らがセラピストとして相談を行っ

た際、チームアプローチを行っていることはどのように役立ちましたか?」についてのKJ法の結果としては、Fig. 3のようになった。島は「安心感がある」、 「自分では気づかない点をチームから教えられる」に分かれた。順に見ていこう。「安心感がある」の島では「とにかく安心感があります」、 「もし間違った方向に進んで行ったとしても修復できるだろうという安心感があります」とチームメンバーからのサポートを安心感として感じることが伺える。このことは「その場で訂正やアドバイスをもらうことができ、また自分の言葉が足りない部分は、援助してもらえるため、専門的な面接でも対応できる点が良かった」といった意見に繋がり、学生が初心者であってもチームアプローチを取ることである程度の相談が行えることを学生が実感していることが考えられる。また、「自分では気づかない点をチームから教えられる」の島では「自分では気づかないことをチームメンバーにフォローしてもらえたこと」、 「チームでやっていることで、自分のケースを他者も見ているので、自分が面接をしている時に気づかなかった点に気づけるということで役に立ちます」といった意見があり、学生が行った面接をチームが客観的に見て、自らが気づかない点を指摘されることは大きな学習になっているようである。このことが一歩進んで「相談中に行き詰った際は、他のチームメンバーならどのような対応をするだろうと考えることで、相談に役立てることができた」といった自分で面接を客観的に考えることに繋がっている。

このように学生がセラピストのときにチームアプローチを採用することで安心感を持って自らが気づかない点を指摘されながら面接が行え、ある程度専門的な面接でも行えると考えられる。

4. チームアプローチの弊害

調査の質問4「チームアプローチの弊害として考えられることを教えてください」についてのKJ法の結果としては、Fig. 4のようになった。島は「チームを頼りにしてしまう」、 「人に見られることで緊張する」、 「卒業後の不安」に分かれた。順に見ていこう。「チームを頼りにしてしまう」の島では、「チームがいるからと、たよりにしすぎること」、 「安心感がありすぎて、チームメンバー任せになってしまうことも無きにしも非ずではないかと思います」とチームを頼りにしてしまっているこ

とが同え、このことは弊害として大きいのではないかと推測される。また「人に見られることで緊張する」の島では「他人に面接を見られるということは、とても緊張することですし、それに慣れるまでに時間がかかるのだと思います」、「これは人によりけりなのだと思います」のですが、人に見られることで、余分な力みのようなものが生じてしまうのではないかと思いました」といった意見があり、チームアプローチに慣れていくことが求められる。加えて「自分と他のメンバーが、考え方やとらえ方が異なっているときに、チームとしてのやりにくさを感じた」といった場面もあり、この点は筆者自身が教員としてチームをうまくまとめることが求められる。このような学生が考えるチームアプローチの弊害が「修了後の不安」の島に繋がっている。この島では「修了後は1人でやっていかなければならないため、そこに不安感が残ります」、「メッセージをチーム全体で考えるため、今後チームを組まず一人で相談を行う際にメッセージを考えると難しくなると考えられる」といった修了後に1人で相談を行う際の不安が考えられる。

このようにチームアプローチではチームを頼りにしたり、人に見られる緊張といった弊害が考えられ、修了後の相談に不安を残すことが考えられる。

5. 弊害の改善点

これに対して調査の質問5「質問4の改善点としてどのようなことが考えられますか?」についてのKJ法の結果としては、Fig. 5のようになった。島は「具体的な改善案」、「このままでよい」に分かれた。順に見ていこう。「具体的な改善案」の島はさらに「一人でケースを持つ」、「メッセージを最初セラピストが作り、チームが補う」に分かれている。「一人でケースを持つ」の意見については今後考慮してそういった機会を作り、チームアプローチを行う面接と併用することでより学習効果があるのではないかと推測する。また「メッセージを最初セラピストが作り、チームが補う」については経験をつんだ学生には少しずつ行っていくことが可能と考えられ、実施していきたいと考える。また「綿密な打ち合わせと、考え方の共有が必要」といった意見についてはカンファレンスにおいて徹底していくことが求められる。ただ「このままでよい」の島や「自分により責任感をもつことが大事」といった学生自らの姿勢に関する意見も

あり、現状のチームアプローチを行いながらも改善することは可能であるとも考えられる。

6. 面接をビデオで見返すこと

調査の質問6「自分の面接をビデオで見返すことは、音声だけと比べてどのような違いがありますか?」についてのKJ法の結果としては、Fig. 6のようになった。島は「非言語的情報の確認、修正」、「クライアントの様子を客観的に知る」、「クライアントと身体言語を合わす」、「音声と比べて」に分かれた。順に見ていこう。「非言語的情報の確認、修正」の島では「自分が話しを聞いている時の(CI〔クライアント〕と私自身)仕草、姿勢、表情等が見てとれるのは利点かなあとと思います」といった意見から面接内の非言語的情報を学生が確認していることが分かる。そのことで「自分自身の姿勢や身振り、手振りなどの身体言語を確認することができた。その中で身体言語をどのように利用していくか考えることができた」、「面接をビデオで見返すと、ノンバーバルな部分も分かるので、次の面接時に修正して臨める」という次の面接時に修正や積極的に利用していこうとする姿勢が見受けられる。自分の面接をビデオで見返すことによりこのような学習が行えることは学生にとって大きな利点と言える。また「クライアントの様子を客観的に知る」の島では「実際面接しているときはそれにいっぱいいっぱいになっているため、細かいCI(クライアント)の変化に気づくことができないところもあります」、「目線やしぐさ、また、自分がその時に気がつかなかったクライアントの様子を客観的に知ることができる」、「映像として残っていると、CI(クライアント)の様子を振り返ることができるため重要だと思います」といった意見で構成されている。面接内では学生も面接を進めることで精一杯であり、クライアントの様子を後で客観的に知ることがカウンセリングを進める上でとても有益なことと言えるだろう。こういった学習が「クライアントと身体言語を合わす」に繋がっており、「そのビデオ等を確認した後に自分の姿勢や仕草を出来るだけCI(クライアント)と合わせるようにしています」、「相談中の自分を客観的にみることができるようになり、意識的にクライアントと身体言語を合わすことができるようになった」といった意見からその後の面接において学生が意識的に身体言語を修正し、よりよく面接を行えることが分かる。

このような学習は「音声と比べて」という島の「音声だけではCI（クライアント）の印象、表情が伝わりにくい」、「音声だけとは比べ物にならない効果があった」といった意見に反映され、ビデオを見返すことにより初めて行えるものであることが分かる。

結論として「自分の面接している状況が客観的に見れるという事が、1番の違いだと思います」といった意見に集約されていると考える。

7. スーパーヴァイズについて役立ったこと

調査の質問7「スーパーヴァイズについて役立ったことを教えてください」についてのKJ法の結果としては、Fig. 7のようになった。島は「勉強になる」、「新たな視点に気づき、自分を見直す」に分かれた。順に見ていこう。「勉強になる」の島では「経験豊富な先生に適切なアドバイスを受けることは、初心者である者にとっては、勉強になる」、「スーパーヴァイザーの先生がソリューション・フォーカスト・アプローチを用いて行ってくれたため、スーパーヴァイズを受けるだけで技法の使い方の勉強になった」といった意見がありスーパーヴァイザーからの助言も筆者からの助言と同様に役立っていることが分かる。この島と相互関係にある「新たな視点に気づき、自分を見直す」の島では「私自身が気がつかなかった、面接に求めていることや、クライアントのニーズ、私自身のニーズを、見直す機会となった」、「相談の方針がはっきりしないときにスーパーヴァイズを受けることで、自分の考えている方針でいいんだと自信を持てるようになったり、新たな視点に気づけるようになった」といった意見から学生の具体的な学習が進んでいることが伺える。加えて「自分が疑問に感じたり、モヤモヤしていることを改善するために非常に役立つと思います」という意見が「次回の面接に課題や自信を持って臨むことができたこと」といった学習結果に繋がっていることが分かる。

このようにチームアプローチと大学院生個別のスーパーヴァイズを併用することにより学生の学習がより進んでいることが理解できる。

8. その他の感想

調査の質問8「その他チームアプローチ・ビデオシステムについての感想を教えてください」についてのKJ法の結果としては、Fig. 8のようになった。島は「安全性

の確保、不安感の軽減」、「多くの面接が経験できる」、「カウンセリングを学ぶ上で役立つ」に分かれた。順に見ていこう。「勉強になる」の島では「まだまだ自分が未熟だったり、常に不安感があったりするため、チームで行うことは直後に振り返ることができた」、「面接をビデオで見ながら、他のチームのメンバーにアドバイスをもらった」といった学習を行うことで「良くも悪くも自分の中に抱え込む責任感が軽減されたりするため、学びとしてはとても役に立つものだなと思います」という学びに役立つことや「実際にケースを持ってみて、重たい内容のCIさんと1:1のみで関わるといのは、いくらスーパーヴァイズがあるとしてもその場の危険性の軽減にはならないため、CIさんにとっても多少なりとも安全性が確保されている」といった安全性の確保を学生は評価しているようである。これと相互関係にある「多くの面接が経験できる」の島では「限られたケース数しか持つことができない中で、チームという立場で、多くの面接を経験できたことは、とても大きなメリットであると思う」、「大学院の2年間では担当できる面接に限りがあるため、ビデオシステムやチームアプローチで多くの面接を見ることができるとも役立つと思う」といった大学院2年間で多くの面接を見ることが大きなメリットと学生が捉えており、学生にチームアプローチが受け入れられると考えられる。このような意見が最終的に「カウンセリングを学ぶ上で役立つ」の島に繋がっており、「カウンセリングを学ぶ者にとっていいシステムだと思いました」、「どちらがいいとは言えませんが、私自身にはこのビデオシステム・チームアプローチというやり方は自分の経験を積んでいく上でとても学びになる方法だと思います」、「難しいですが、とてもためになっています」とチームアプローチの利点を学生が理解して学習を進めていることが分かる。

このようにチームアプローチを行うことで学生の臨床面接技法習得に大きく役立っていることが理解できる。

9. まとめ

学生の意見から臨床面接技法習得に関してチームアプローチを用いた学習効果を検証してきた。学生に大きな学習効果を上げていることが伺える。筆者は今後も改善を随時行いながら、このチームアプローチを用いて

学生の臨床心理面接技法習得の学習効果についての研究を続けていきたいと考える。

引用文献

- (1) Barker,P. 1986 Basic Family Therpy (2nd Ed) . Blackwell Scietific Publications, Oxford London. 中村伸一・信国恵子監訳 1993 家族療法の基礎 金剛出版 37.
- (2) de Jong, P., Berg, I. K. 2007 Interviewing for Solutions: Third Edition. Brooks/Cole Publishing Company, California. 桐田弘江他訳 2008 解決のための面接技法 [第3版] 金剛出版 24.
- (3) 東豊 2010 セラピスト誕生 日本評論社
- (4) Hoffman, L. 1981. Foundations of Family Therapy. Basic Books, NewYork. 亀口憲治訳 1986 システムと進化 家族療法の基礎理論 朝日出版社 19-20.
- (5) 川喜田二郎 1967 発想法—創造性開発のために 中央公論社.
- (6) 倉光修・宮本友弘編著 マルチメディアで学ぶ臨床心理面接 誠信書房
- (7) Minuchin, S. 1974 Families and Family Therapy. Harvard University Press, Cambridge.
- (8) 大塚義孝 2009 臨床心理士の専門性と資格資質 財団法人日本臨床心理士資格認定協会監修 新・臨床心理士になるために [平成21年版] 誠信書房 2-10.
- (9) Watzlawick, P., Bavelas, J. B., Jackson, D. D. Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes. Norton, New York. 1974. 山本和郎監訳「人間コミュニケーションの語用論 相互作用パターン, 病理とパラドックスの研究」 二瓶社 1998年. pp.209.
- (10) 遊佐安一郎 1984 家族療法入門 システムズ・アプローチの理論と実際 星和書店 249-250.

